

# 化学教育 徒然草



## — 今日はどうな話を —

NAKAGOME Shin

中込 真

和洋九段女子中学校高等学校 校長  
化学教育カリキュラム構築小委員会 委員



巻頭言

先生の授業は雑談の方がおもしろいね、と生徒たちに言われ続けてきた。確かに化学は懐が深い学問なので、授業の内容にさまざまな切り口で話題を挿入することができる。私は言われる度に雑談でも雑学でもない、と言い張ってきたが、今回の高校学習指導要領の改訂からは、堂々と文部科学省が推奨する教科横断型の取り組みだ、と胸を張って言えるようになる。多くの先生方がなさる教科書以外のお話は、雑談というよりも挿話という表現の方が合っているように思えるし、なぜ生徒たちがその話題に興味を感じるか、システムとしての挿話の効果を一度考えてみる必要があるかもしれない。

水酸化鉄コロイドの実験後に、宮沢賢治は短歌を詠んだ。

鉄の gel 紅く濁みて水はひかり五時近ければやめて帰らん

以前なら興味を持つ生徒もそれなりにいたが、宮沢賢治に関心がなく銀河鉄道の夜はアニメしか知らない世代を相手にする時代である。残念なことに鉄の話題ならハガレンこと鋼の錬金術師の方が関心を持ってもらえそうである。世代間の知識の隔絶は確実に進んでいる。

私は生徒が感じる挿話の面白さや印象の強さは、教科書の現象や語句が既知の意外なもの結びついて、生徒自身が持つ知識がある種の体系化に向かうことを実感することにあると考えている。そして挿話が効果を発揮できるためには、生徒の持つ知識や体験の内容と、教員が提示する挿話が上手にリンクする必要がある。教員側はいまさらゲームやアニメに精通するのは困難であろうし、生徒側に歴史や文学作品の知識を強要するのも無理がある。これからの挿話は、中間の年齢層の先生方が主題を選定し両者の橋渡しをするのがよいと思う。

思考力が脚光を浴び、知識は不要とさえ言われる昨今である。思考力を育てるために必要な知識とはどんなものか、文化としての化学を味わうにはどんな挿話が適切なのか、ウェブサイトの閲覧だけでは決して体験できない実験の良さとは、など私たちは改めて問われる時代に生きていると感じる。

[連絡先]

102-0073 東京都千代田区九段北 1-12-12 (勤務先)